
凸凹キャンディーライフ

ヒラコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

凸凹キャンディーライフ

【著者名】

N6151A

【作者名】 ヒラノ ヒラノ

【あらすじ】

大工の大助はひよんな事から従兄弟にあたる「めい」をしばらく預かる事に。30歳になつても彼女もいない大助にいきなり小さな女の子が…！？暖かな凸凹ハッピーライフ…！

めいとの出会い

かあちゃんから電話があったのは俺が30になる誕生日の前日だった。

「大助つ！…あんたどーせ当分一人なんでしょう？！部屋空いてるわよねえ！？」

俺は仕事から帰つてすぐの電話に疲れを感じつつ靴下を脱ぎながらテキトーに返事する。

「んあ～？まあ空いてるけど何？またリヨー！」が出来ちやつたんかい？」

かあちゃんはいきなりさつきまでたた事では無いよつた声を押さえ、冷静になつた。

「それがねえ…里おじさんが先月亡くなつたでしょ？おじさん、一人暮らしだつたはずなんだけど…あの歳で彼女いたみたいでねえ。」

。。。

「まさかその彼女を俺んちに置いてくれつてか？（笑）」

俺は笑いながら自体を把握出来てなかつた。

「おじさんの子供がいるのよ…彼女はおじさんを追つて…」

「マジかよ…」

俺はやつと自体の恐ろしさを知る

「で…その口を俺にしばらく預けるつー話…？」

「ウチは今リヨーロの子の世話でこっぱこっぱいだし…あんたんちの方が近いし環境良いからねえ。。。」

で、3日後のかあちゃんが俺んちにその子供を連れて来るらしい。ん？俺…なんか忘れてねーか？…………！？オスかメスか何歳か聞いてねえ～！！！！

そして目を白くさせながらも約束の日が来るのだった。

「…。」

「めいちゃん、大丈夫よ。おじちゃん顔とか悪いけどさつと優しく

してくれるわよ！」「

「顔はしょーがねーだろ！しかもあんたがこんな子供に好かれない
顔に産んだんだからな！」「

俺の目の前に小さくなつて心細そつた田の

「めい」

がいた。どうやら幼稚園の年中らしく5歳で自分の親が死んだ事を
わかつていないらしい。

「俺んちでいいのか？」

めいは辺りを見回してから俯きながら「クリ」と小さく頷いた。
30歳になつたばかりの俺は結婚の気配等無いまま、まだ小さな従
兄弟との共同生活が始つた。

ビールやタバコ、仕事で使う大工道具のような危ない物、もちろん
Hな本はめいの田に入らない所に隠した。めいの荷物はこりやまた
お子様サイズでカワイイピンクのキティちゃん柄。

「めい、キティちゃん好きなんか？」

「おじちゃん、キティちゃん知ってるの！？」

「こりゃーおじさんやめい！キティちゃんくらい知ってるわー！」「

目を丸くしながらこんな事を聞いて来るめいであつたが里おじさんはキティちゃん知らなかつたのかな…

俺はめいにめいの両親の事を聞けなかつた。今はダメだ。こんな小さな子に俺でもしつくつこない話は出来ない。

「…ねえ」

「おう！なんだ？」

「何て呼んだらい～の…？おじちゃん言ひトイヤつて…」「

「ん…リヨーくんとこの子も大ちゃんだしな…」

「だいちゃん…？」

「んもー…大ちゃんと良いやー…」

「だいちゃん…トイレ…」

「おつ！あいよ…こっち来いや…」

めいは新しい環境なのが歳のせいなのか自分でトイレに行けないら

しい。だからいつも俺が着いててやる。俺は次の日現場に入ってる事をめいの小便の面倒見ながら思い出した。

「あー…俺明日仕事じゃん…！」

「だいちゃん…どうか行つちゃうの…？めい一人になつちゃうの…？」

めいは心細そうに俺を見ながら言った。

「ん…でも安心しろ！一人にはさせん…！」

明日は子供好きな頭領のおかげで現場近くの頭領の家で奥さんが仕事が終わるまで面倒見てくれる事になった。

「大助君、めいちゃんいつでも連れて来ていいのよ～おとなしくて良い子じゃないの。ねえ、あんた。」

「ああ、大助の従兄弟にあたるんだってなあ…じいちゃんとこいつでも来いよ！」

めいは嬉しそうに手を降つてうちに帰つた。

帰り道、奥さんとどんな遊びをしたか等語つてくれた。

「でね、おでだま作つてくれてね、お庭でお花にお水あげてね、幼稚園より楽しかったあ

…おい、までよ…？」

「めいちゃん…今…よ…幼稚園…？」

「うん おばちゃんと遊んだ方が楽しかった！」

俺は幼稚園の事を忘れてたんだ…

幼稚園つて大変だ！

今日はめいこと初めて外食する事になつた。めいの希望もあってハンバーグに決定し、俺んちから歩いて15分くらいのレストラン街の中にある。

「めい、決めたかあ？」

「うつ、うん。」

「ボタン押しちまうば！」

「めいが押すつ！…」

「ショーがねーなあ。今回は譲つてやらあ…」

「だいちやんおとなげなあ～い！…」

そんなこんなでお子様ディナーピートンバーグセシットを注文。

「ああ～めいちゃんだあ～！」

後ろからやかましいくらい元気な声でめいの名前を呼ぶ女の子が。

「あつ、ゆきちゃん」

「ねえ～、なんでよつちえんこないのオ？なんでなんでなんで～！」

！」

「「ひらひらゆき～外で大きな声を出すんじゃない…あ、すみません～ゆきの父です。」

「あ～どーも。めいがお世話になつてマス！」

「お父さんお若いですねえ！…」

「イヤア～！俺はめいの父親じゃあないんつすよお～！」

「あ、すみません～！余計な事言つてしまつたみたいで…」

どつやひるのゆきちゃんのお父さん、小林さんはシングルファザーでゆきちゃんが2歳の時に奥さんを亡くしたらしい。めいと少し状況が似てる。

「めいちゃんはままいないの？」

「うん。いたけどなんか会えなくなっちゃつたみたい。」

「ゆきのまましんじゅつたんだつて～めいちゃんのままもしへんじゅ

つたの！？

俺はすかさずその場を違つ話題にした。めいに死ぬだとか両親の事は深く教えたくない。

「おひ、肉来たぞお！！！」

「ゆき！？そんな事言つもんじやない！…めいちゃん、気にしないでね。」

小林さんも気を使ってくれたようでもめいも何事も無かつたようにハンバーグを美味しそうに食べていた。

俺は帰りに小林さんに幼稚園の事や子供を預けている間の仕事の事をいろいろ聞いた。なにしろ、かあちゃんが、んな事教えてくんなかつたもんだから。

「めいちゃんばいばい！」

「ばいばい。」

「んじや、おやすみなさい！」

小林さんは俺に令をして帰つて行つた。

今のが幼稚園は保護者以外は特別な許可が下りないと送り迎えさえ出来ない程厳重警戒されてるらしく、軽々しく近所のおばちゃんとかに頼めないらしい。俺の仕事柄、朝から始まり予定どおり作業が進めば6時前には必ず上がれる。しかし幼稚園は2時半には終わるし延長保育は6時まで…つう…頭が痛い…

「ん？どした？もうすぐ家だぞ。眠いんか？」

めいは目をこすりながら首を大きく横に振つた。めいの性格が少しわかつた気がする…

「お前くらいおんぶでも抱っこでも出来るんだぞう？」

それでもめいは目を半開きにしながらフランフラン歩き、家まで自分で歩いて帰つた。変な所が頑固で、弱いところは弱い。なんだか俺に似てるなア…とか思いつつ昨日から敷きつ放しの布団にめいを寝かし、めいが来たからか久しづびりのビールで今後の事を考えなくては、と。

ん…？何から考えりやあいいんだ！？

「うわ、俺がどうかしてやるー！」

「うん…」「いや、イヤだ…」「めい？大丈夫か？おい！」

めいを引き取つてから一週間が経つが、一昨日くらいから夜中になるとめいはうなされていて、こうやって俺が声を掛けながらお腹や背中をさすると落ち着くんだが…。

「なあ、お前は小さい時うなされてたとかある？」

「俺っすかあ？どおですかねえ…あつ、でも決まって同じ怖い夢を見てた時期つてありますよー！大助さん、うなされてんすか？」

「いーや？俺じゃねーよ。」

「えつ？じゃあ…」

「ありがとなー！」

俺は毎飯時の大工仲間に聞いてみたがやはりいろんな人が怖い夢だと日常のストレスとか言つ。やっぱここは頭領の奥さんに頼るか。「そうね…めいちゃん、いきなり環境が変わったわけだし、お父さんやお母さんもいきなりなくなっちゃったのよ？やっぱりその不安やストレスが原因かもしれないわねえ…」

「どうしたら良いんですかねえ…。俺、うなされて涙流してるめいの姿見るの辛いんですよ。まだ会つたばかりですけどやっぱり俺の従兄弟ですか…」

従兄弟ってこんな大切なもんだとは思わなかつた。でもなんだか他の従兄弟よりずっと大切で、家族のように思えてきたのは確かだ。

「寝る前にいつも何してる？」

「えつ？あつ、うん…テレビをぼーっと一人で見てるか、えつと…」

「絵本なんかを読んであげたりいろいろ日常の些細な話をしたりしないやダメよ。こういう事で子供はストレス発散出来るんだから!」「絵本ねえ…」

俺は大人の絵本くらいしか買わないからいまいち子供の絵本「コーナー」に戸惑った。（大人の方の絵本への戸惑いは忘れちまつた。）俺は頭領と遊んでもらっていためいを呼んで本屋に向かった。

「めいはさ、何か好きなあんのか？」

めいはじーっと絵本コーナーを見回し一冊俺に渡した。

「めいわー、これ絵本じゃねーぞ?字イばっかだぞ?」

「いいの。これがいいなあ。これ買ってくれる?」

幼稚園生つてのは絵が好きなんだとばかり思つてたがめいは違つたようで『世界の名作』などと難しそうな本を持って来た。（ガキの頃の俺にはとんでもね一本だった）

「めい、寝る前に今日買った本読んでやるべ。」「…いいの!?」

「おう！今日はどれが良い？毎日一つずつ読んでやるからな…」

「じゃあね…これ！」

「ヘンゼルとグレーテルか。ふむふむ。よし…はじめつぞ…」「俺はこの話の内容など考えずに読んでしまつた。

「お母さんとお父さんはヘンゼルとグレーテルを捨てて…」「やめてぇ…!!!!もう読まないで……」

「お…お…お…どうしたんだよ…泣くなよ…」

俺はようやく事の重大さに気付いたんだが、めいは泣きやまない。親が子供を捨てる話なんて聞かせちゃいけなかつたんだ…俺のくそつたれ…めいはきっと両親が自分の事を捨てたんだと思つてる。今俺はどうしたら…

「めい、じめんなア。ほれ、抱っこしたる…そーだ！夜遊びしちゃおう…」

丁度次の日が一人そろつて休日だしレンタルビデオ屋に行き、めい
が見たいビデオを借りて夜中まで一人で見た。めいによく笑顔
が戻って、俺は明日あたり親が死んだり親が子供を捨てたりしない
絵本を買いに行こうと思っている。もちろんさつきの本はお蔵入り。

めいの家にあつたモノ

めいがうちに来てから一週間、俺はあちゃんから勧められてめいが住んでいたとされる里おじさんの家に行つてみる事にした。俺んちから車で一時間。頭領の車を借りてめいを幼稚園に送つた足で向かう。

「だいちゃん、どつか行くの?」

「おう! 買い物にな!」

「そつか…ちゃんと迎えに来てね。」

「約束すっから心配すんなつて!」

近いと言つても車で一時間だからな…

里おじさんは一人暮らしだつたつて言われる割に一丁前に大きく、めいも母親も住んでたんだなあ。と思わせる造りだ。

「えへつと…めいの物探すか…」

俺は一階の茶の間にあるタンスの引き出しを探す。

めいの写真とか無いんかな…やつぱめいつて秘密にされなきゃいけない存在だったのかな…おじさんは週1ペースで会い、一緒に飲む仲だつたしかあちゃんとも仲が良かつた。なのにめいの事は一切話さなかつた。別に60つつたつて男な訳だし彼女が出来ても誰も反対しねーのに…生涯結婚しないつて決めてたんかな…

めいのおもちゃや赤ん坊の時の服は綺麗に和室の押入れに片付けられていた。

「あつたよ…」

俺は安心した。めいはちゃんと育てられてたんだな…良かつた…しかしこを探しても彼女の物が無かつた。まるでめいとおじさん2人きりで住んでいたみたいに…

最初から彼女なんていなかつたのかな…じゃあなんでめいが…うーん…

気付いたら1-2時を回つていて俺はめいを迎えて行かなくては…と

…んんつー？母子手帳発見……………」これはあはりしこアイト
「じやないかあーーー！」

母親の名前…

「梅野さゆり」

…さゆりさんか…ええつー？わつ…若い…俺と同じ年ー？おじさん
やるなア…！…！…

梅野つて事は結婚してないんだな…結婚してたら里山だもんな…。

子供の名前、めい。5円5田生、2890♂ 42センチか…小さ
かつたんだなあ…さゆりさん…あんたどこ住んでたんだ…

母子手帳はそのまま俺の実家に送った。うちに置いてめいが見
つけたら嫌だからな。

俺は高速を走りながらいろんな謎を考えたがやっぱわかんなかつた。
でもあるおもちゃの数や、服の数を見ればめいは大切にされてたん
だと思えたからそれだけ救われた。

「高林ですけど、めい迎えにきました。」

「はい。ちょっと待つてくださいね。めいちゃん、お兄さん迎
えに来てくれたよーー！」

かわいい先生だなア…

「あつ、ありがとうございましたアーーー！」

「めいちゃん、優しくお兄さんで良いね。先生、いらっしゃいな。」

「うん。じゃあ先生をよつならーーー！」

「おつ…おいーーさつきの先生…」

「えみ先生の事お？」

「えみ先生かあ…」

「だいぢやんスキになつちやつたのよ？えみ先生かわいいもんねつ

！」

「「」」」やあーー違つわーーー！」

素敵なお先生との出会いもあつたし今日はなんだかご機嫌な俺！めいも新しい絵本にご機嫌でした。

めいヒートソース

「めいー！メシだぞー！」

「うんー……えー……またマー ボーデーフ？」

「仕方ないじゃんかあ！男の料理なんだかつさあ！」

どうも男一人暮らしつていうと毎日の食卓は近所のラーメン屋か牛丼屋、コンビニやカップ麺で済ますが日常で今まで湯を沸かすべからいしか台所を使つていなかつた。しかしめいが来てからなるべく手作りの物を心掛けているんだが、こりやまた大変で…月曜から日曜までチャーハン、マーボーデーフ、肉野菜炒め、揚げるだけの冷凍コロッケ、雑炊のローテーション。これでも仕事仲間に教えてもらひながらメニューを増やしてつてゐる。

「ねえ、スペゲッティーが食べたいよー！」

「えつ！？じゃあ明日作つてやつからー！」

「わーいー！ミートソースが良い！」

返事しちゃつたけどマイイチ作り方が…茹でるだけだよな…う

…明日佐藤に聞くか。「えつ！今度はミートソースつすか！？作

つた事無いつておかしいつすよー！」

「苦手なんだよー！すまねえ！教えてくれ！」

「教えるも何もパスタとソース、売つてますよー！そりやもうあつと
いう間に出来ますから高林さんでも作れますよー！なんたつてソース
温めればいいだけですからねエー！」

今はそんなハイテクな物があるんだなア。と、単に俺がバカなんだとも分からず佐藤の説明に関心するばかりだった。とりあえず普段は通り過ぎるだけのスーパーのパスタコーナーへ足を運んだ。

「いろんな太さがあんだなあ…これうどんと違うのか…めい、普通の太さで良いよなあ…？」

「うんー！ミートソースだよー！ミートソースつー！」

「わかつてらあ……にしてもミートソースも結構種類があるナア

…

捨てるのが面倒だからという理由もあって、缶ではなくパックのを選んだ。

「上にかけるやつは？チーズ…！」

「粉チーズか！ええと…乳製品コーナーなんか…」

初めてのパスタコーナーで時間がかかり、すっかり日が暮れちまた。

「めい手洗つて来い！」

「だいちゃんもだよー！バイキンつてコワいんだよー…！」

「はいはい。じゃあ手伝え！…つて言つても熱湯ばつか使うし危ねえからテレビ見てな。」

「おなかへつたあ。早く作つてよお？」

「あいあい。ほらお子ちゃんは向こう行つたー！」

さあ！取り掛かるか！初めてのスペゲッティー！一人暮らし始めてはや一年。手作りと言えば納豆御飯程度の俺が3週間前からずっと家庭料理なんてつ…こんな家庭的な俺を求める綺麗で優しい女性はいませんかアー！？

つと、いろんなどーしょーもない妄想をしていろいろうちに完成。

「出来たぞー！」

「わあ！スペゲッティーだー！」

「こんなに喜ぶか！？」

「ぱぱがね、スペゲッティー作ってくれたんだあ。でももう作つてくれないのかな…？」

「そうなんだ…」

そつか…里おじさんがよく作つてたんだなあ。めい、おじさんが大好きなんだなア…

「よーし！めい！お前が食べたい時は俺が作つてやるぞ…！お前の父ちゃんより旨いの作つてやつからなあ…！」

「ぱぱのおいしいからだいちゃんじゅ勝てないもんねー！」

「ぜつて一勝つもんね！なんたつて俺は料理の鉄人だぞーー！」

「ひちゅ、てえーつじん…？」

そんなことなでこれから俺はいろんなメシを作れるよつてなんなきやいけない事になつてしまつた訳で、めいの絵本とともに料理本も増えるだらうなー。なんて思つて、本棚買わなきやなとか考える今日この頃。

そういうや、もうすぐ夏服になるけどめいの夏服荷物に入つてるんか！？

服選びは大変だ！

「だいちゃん…おーしゃーてつ…お洋服買ってくれるんじょー？」

「ん…まだ8時じゃねえか…寝かしてくれい…」

「だあーめだよーお出かけするのーほらっ！顔あらつてきてーー！」

最近めいはこんな調子で俺を起こしてくれる。だんだんお姉さんになってきたんかな。お姉さん越してうるさいおばちゃん…まあ、起こしてくれたり晩飯作るのを手伝ってくれるのはありがたいんだがな。

だんだん暑くなってきて周囲も半袖になってきてるしめいの夏服も出してみたんだが子供の成長ってのは早いみたいで去年のはヘソが見えそななくらい小さくなつてた。女の子が着るようなもんなんてわからないけど、普通の家庭で買つていいような可愛い服を買つてやりたいと思つていい。

「GAP…MIKI HOUSE…? ANGEL BLUE…?」

いろいろあるんだなア…」

「ねえっ…これすごくカワイイ！」

「スカートか。やっぱ女の子だなあ。げつ…これ一万もすんのかよ！」

「ダメ？ダメ？」

「もーちょっと見てみないかア！？もつと良いくものあるかもしんねえぞーー！」

子供の服つて俺のTシャツの10倍くらいすんだな…恐ろしい…とりあえず休みがてらこお茶しよつひとつ事になつて一旦外へ。ぬぬつーこれは安い！そーいやわつかのGAPやらMIKI HOUSEやひつてのはブランドだよな…だから高いんじやんか…！今頃気付いた。あー…買わなくて良かった…。俺はチーン店の安い服屋を見つけてホッとした。さつきの値段じゃあ今日は3着程度

しか買えんわ…

とりあえず俺は「コーヒー。めいはリンゴジュースを頼み、一服してから店に行つた。「めい！好きなの選べよーーー！いくらでも買ってやる！」「やつたあ！」

めいは大喜びで半袖5枚とジーパン2枚、ワンピースも2枚選んだ。これで2万いかないなんて安過ぎないか！？

「あとねえ、パンツとシャツと…水着！ー！」

「えつ！？水着イ！？」

「そうだよ！幼稚園で夏は水着がいるのつ！」

「さつきの店じゅあ売つてねえよなあ…」

「スーパーに売つてたよお！」

最近のスーパーってなんでも売つてんだなあ。と関心しながら家の近くのスーパーへ。

「これがいい！ねえ、だいちゃんこひらちー！これカワイイ！めい絶対これにする！」

「4800円…女の子の水着つて高いなあ…まあどーせいるんだし。サイズ大丈夫かあ？試着してみろよ。」

「だいちゃん、パンツも脱ぐの？」

「いや！試着だからダメだろ！」

「ん~きつい気もするけど…。」

「水着つてピチッとするもんだろ。俺も海パンはピチピチだったし。」

「じゃあこれがいい！」

めいは決めるのが早くて助かる。でも一度良いつて思つたものは絶対放さないから口出し出来ねえんだなこれが。

家に着く頃には二人共クタクタで、今日はしようがないから近くのコンビニ弁当で済ませた。風呂沸かすのも面倒で風呂好きのめいには申し訳無いが今日はシャワーで済ませてもうつた。

下着類のついでに買ったパジャマを早速着て、10時には一人揃つて眠りについた。

親つて大変なんだなあ…金の方はめいを引き取る時におじさんの遺産をもらつたから大丈夫だけど。俺なんだかずっとめいの保護者でいいや。いつかは俺から離れていくめいの事を思うと急に寂しくなつた。風呂もいつか一緒に入るの嫌がるのかなあとか。洗濯物一緒に洗つたら不潔がるとか…

めいの気持ち

少し遅れての衣替えで、朝からめいは新しい服に御機嫌だ。

「支度出来たかあ？あ、今日は幼稚園じゃないからカバンとかいらねえぞ。」

「今日幼稚園ないの？」

「ほれ、開園記念日だよー！先生に言われてないんかい？」

「そうだつたあーーじゃあどこ行くの？？」

「俺は仕事だから今日はゆきちゃんの家についてもらおつかなつて思つてんだけど。」

「ゆきちゃんと遊ぶーー！」

昨日幼稚園に迎えに行つた帰りに小林さんに一度誘われて今日はめいを預かつてもうつ事に。手ぶらじや悪いから「ンビニで子供が喜びそうな菓子とピックのウサギのトランプを買って行つた。「じゃあよろしくお願ひしますーー6時には仕事終わるんで現場近いし6時半には迎えに来ますーー！」

「御預かりしますね。めいちゃんは蕎麦食べられますか？お昼は蕎麦にしようと思つてるんですけど、アレルギーは大丈夫でしょうか」「すいません…まだ一緒に蕎麦は食べたこと無いんでわかんないんです…」

「めい、おソバ食べれるよーー！」

「じゃあ良かつたーー！」

「すいません、じゃあお願ひしますーー！」

俺はめいを小林さんに無事預けて現場へ。

「ゆきちゃんババぬきできる？」

「同じ数字をすてちやうやつー？」

「うんーーゆきチのトランプでしょーーーー！」

「こーよーーめこひやんくばつてーーー！」

「うん！」

「ねえねえ！めいちゃんのお兄ちゃん何をいなのぉ～もひおじさん
？けつこんしてるのぉ？」

「けつこんしてないんだつてえ。だいちゃんもうすぐめいのお父さ
んになるかも。」

「えー！？なんでつ！？無理だよー！」

「だつてめいのパパもママも、もうめいの事スキじゃないんだもん。
だからあたしももういいのー！だいちゃん優しいし、顔ゴリラみた
いだけどスキだよ。」

「ふーん。でもゴリラのお兄ちゃんはめいちゃんのお父さんじゃな
くて…えーっと…あつ！じゃあお母さんは誰になるのぉ！？
「知らない。あたし新しいお母さんいるな。めいのママももうい
らない…めいはだいちゃんだけでいいの！…」

俺はめいがこんな話をしているのも知らずに、仕事にとりかかつて
いた。子供って怖いもんで、俺達大人が想像する子供の会話よりず
つと大人なんだなア。両親の事は触れるべきだけど、ショックを受
けるめいの事を考えるとその話は避けたくなる。

めいがまさか自分が嫌われて捨てられたんだと思つては…俺
はバカなくらい鈍感だからめいの気持ちを理解しているつもりで出
来ていなかつた。仕事が終わつて迎えに行くためいはなんだか元気
が無くて…

「めいどうしたんだア？」

「ウチのゆきがまた余計な事言つたみたいですみません…」

「いえ！子供同士の事つすから気にしないでください！…今日は本
当にありがとうございました！…」

とりあえずめいに落ち込んでいる理由を聞く事に。

「なア、ビーしたんだ？ゆきちゃんと仲良く出来なかつたんかい？」

「つづん。」

「じゃあどうした？」

「別にい…

俺はその場にいたから何とも言えなかつたが、やつぱ喧嘩しても沈みすぎで。

あー！…どうしたらいいんだア！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6151a/>

凸凹キャンディーライフ

2010年10月10日02時01分発行